

平成 30 年 6 月 24 日現在

機関番号：32816

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K21463

研究課題名(和文) わらべうたを手がかりとした音楽学習における知識変換プロセスに関する研究

研究課題名(英文) Study for Multidimensional Knowledge Working in Music Learning through Investigation on Japanese Nursery Rhyme

研究代表者

森 薫 (MORI, Kaoru)

東京未来大学・こども心理学部・講師

研究者番号：90624859

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、子どもがうたうわらべうた「どれにしようかな」を収集、分析し、このうたにどのような音楽的特徴があるのかを検討するものである。またこうした子どもの音楽実践においてはさまざまなタイプの知識について検討し、音楽教育分野における知識観を再定義しようとするものである。研究の結果「どれにしようかな」の旋律には言葉のイントネーションだけでなく、フレーズ末尾で上行する日本の伝統的な音楽の旋律法が適用されることが明らかになった。また、子どもの音楽実践において、直観的な音楽の知識が違和感として顕在化し、それが言語化されることが、あらたな知識を共同生成するための契機となっていることもわかった。

研究成果の概要(英文)： This study aims to investigate on a Japanese nursery rhyme “Dore Ni Shiyokana (that means “which one should I choose, God in the sky?” in English)” and its musical structure, melody method. Also, it aims to reveal multidimensional knowledge working in children’s musical practices and suggest new definition of knowledge in music education field.

The following general observations could be made from the study results: First, children apply not only Japanese intonation to the melody of “Dore Ni Shiyokana”, but follow the rules of melody method in Japanese traditional music intentionally. Second, when children feel “strange” and verbalize the feeling in their musical practice, they eventually begin their inquiry of generating new knowledge in music cooperatively. It is considered that this strange feeling is one form of the “Intuitional Musical Thinking Knowing” (Elliott et al., 2015).

研究分野：音楽教育学

キーワード：わらべうた 音楽学習 知識

1. 研究開始当初の背景

本研究の題目は、「わらべうたを手がかりとした音楽学習における知識変換プロセスに関する研究」である。この課題に関して開始当初、学術的背景として以下の3点があった。

第一に、わらべうたの背景にある様々な要因(遊び、言葉、身体、生活等)と、わらべうたの音楽的特徴とのつながりを検討し明らかにしたうえで、それに根ざした「音楽づくり」の教育方法が開発される必要性があった。わらべうたの背景にあるどの要因が、どのようなリズムや旋律、拍節構造等の創出へとつながっているのかについては、これまで十分に分析されてこなかった。本研究では、産出されたわらべうたそのものだけでなく、うたう子どもたちの身体がどのように動いているのか、彼らの用いる言葉にどのような特徴があるのか等にフォーカスしようと考えた。

第二に、同じ歌い出しから即興を交えて無限に広がるわらべうたのありようや、地域ごとにみられる特徴的な旋律法の分析を行い、子ども達が何を手がかりにわらべうたの即興を展開していくのかについて明らかにする必要があった。わらべうたには同じ歌いだしで始まりながら異なる展開をみせ、別の歌詞や旋律をもつうたへと変化していくものがほとんどである。従来、その多様性には着目がなされておらず、一つの歌いだしから始まるわらべうたは、一つのパターンであることが暗黙裡に前提されていたと考えられた。

第三に、子どもたちがわらべうたをうたい、新たなバージョンの創出をする際にはたらいっていると考えられる、様々な種の知識について検討する必要性があった。学校教育の分野においては、長きにわたって明示的な知識が学習内容の中心に据えられてきた。明示的な知識ではないタイプの状況依存性の高い知識や、身体に結びついた知識について、音楽教育分野で十分な検討をおこなう必要性があると考えていた。

2. 研究の目的

1.を踏まえて本研究の目的は、子ども達がうたうわらべうたを手がかりとしながら、音楽学習における知識の実践的展開について明らかにすることであった。この目的を達成するためのサブ目的として、以下の3つを設定していた。

となえうた「どれにしようかな」の採集調査と分析

わらべうたの実践と新たなバージョン創出の過程を知識という視点から捉えて考察すること

音楽学習における知識の実践的展開について、そのプロセス・モデルを提示すること、の3点を設定していた。

3. 研究の方法

開始当初は、(1)日本各地の幼稚園・保育

所・小学校でとなえうた「どれにしようかな」のビデオ撮影による採集 (2)採集したデータの歌詞、旋律、リズム、拍節構造を分析し、音楽的特徴を抽出 (3)子ども達が歌い遊ぶ過程におけるあらたなバージョン創出と、そこではたらく暗黙知と明示知の変換プロセスの分析 の3つの方法を想定していた。

しかしながら、わらべうたの多様なバージョン自体は収集できたものの、新しいバージョンがつけられる過程を観察から見出すことができなかった。また、音楽実践で生じるあらたな知識の共同的生成の過程は、音楽科授業における子どもたちの発話や行為の分析からの方が詳らかにしやすいことが明らかとなってきた。

そのため、(1)(2)のわらべうた収集・分析と、(3)の知識に関する分析は、実質的には独立した2つの研究として進めることとなった。(3)については、2015年4月から2016年3月にかけて週に1回ずつ継続的に、小学校3年生の音楽科授業のビデオ観察調査をおこなった。この観察調査と、教諭に対するインタビュー調査によって得られたデータを用いて、分析をおこなっている。ここではマイクロ・エスグラフィの手法をもちい、Elliott et al.(2015)の提示した「音楽の思考・知(Musical Thinking and Knowing)」論を枠組みとしながら検討・考察を進めていった。

4. 研究成果

(1) となえうた「どれにしようかな」の実態について

平成 27(2015)年度は、全国各地(埼玉県、秋田県、北海道、佐賀県、福岡県)で採集調査をおこない、それを分析・検討した結果を学会大会にて口頭発表した(おもに下記[学会発表])。ここではとなえうた「どれにしようかな」の旋律法や即興の方法、身体の動きと音高の上下の明確さについて考察している。

調査で明らかになったこととしては、主に、以下のことが挙げられる。

音程

となえうたは長2度音程の2音間を行き来しながらうたわれるものとされているが、全体的な傾向として、子どもたちの「どれにしようかな」は旋律感のはっきりとしないものも多い。採集された76のうち、うたの最後まで長2度音程がキープされていると判別されたものは、半数以下の30であった。とりわけ、歌詞の中にオノマトペ(「バンバン」等)が登場すると、その直後から顕著に旋律感が失われていくことが多かった。これは、となえうたの旋律法のひとつである「歌詞のイントネーションに則した音程の上下」が、オノマトペには適用しにくいことが影響した結果であると考えられる。

また、調査の中で、1人の子どもがうたっているところに他の子ども達が寄ってきて参加し、複数の子ども達でうたい出すという

場面が数回みられたが、ここで興味深い現象がみられた。それは、数名で声を合わせてとなえる際には、2音間の上下が明確なものとなり、より旋律感のつよいものになるということである。先述のように、子どもがひとりとなえる場合にはこの音程はそれほどはっきりとしたものではなく、またうたの途中で2度音程が消失していくことも多いことと考え合わせると、子ども達のとなえうたの実践において、2度の音程が「声を合わせやすくするためのツール」として潜在的に機能している可能性が示唆された。

旋律法

子どもたちは、言葉のイントネーションに即した旋律でうたっているだけでなく、日本の伝統的な音楽の旋律法である、フレーズの末尾に長2度上行して終結するというルールを、暗黙裡にまもりながらうたっていた。さらに、手指の動きを観察したところ、その動きが弾むように垂直的である場合には、テンポや音高の上下が安定したものとなり、動きが水平的なものである場合にはテンポや音高の上下が不安定であることも示唆された。

以上の内容を中心に、主な分析結果については、研究報告として学会誌に掲載された(査読あり、下記研究業績の〔雑誌論文〕)。当該の論文では、上述の考察の内容に加えて、社会文化的アプローチの論者エンゲストローム(Yrjö Engeström)の活動理論を用いながらとなえうたの新しいヴァージョン創出の仕組みを検討した。そのうえで、音楽科における教材化に向けての基礎的検討を行っている。

(2) 音楽学習における多元的知識について

つづく平成 28(2016)年度・平成 29(2017)年度は、上述のサブ目的に焦点をあてて研究に取り組んだ。まず子どもたちの音楽学習とそこでの知識の展開を詳らかにするために適切な方法論を検討した。またあわせて、音楽学習における知識をどのように捉えるべきかについて、認識論や学習論の分野の先行研究を収集し、整理していった。その成果は以下の通りである。

音楽学習における知識論の必要性

まず、教育学において知識の問題がどのように論じられてきたのかを、イスラエル・シェフラー(Israel Scheffler, 1978)やネル・ノディングス(Nel Noddings, 1998)の研究をもとに整理し、教育の視点から知識の問題を検討することが必要と考えられる根拠を明らかにした。また、日本の音楽教育学の先行研究において二元論的な知識観が想定されてきたことを指摘し、そこにどのような問題があったのかについても検討した。ここでは、知識の「個人主義」「客観主義」の問題について論証した。

本研究では、こうした問題を克服するための視座を、プラグマティズムの代表的な哲学

者で教育学者でもあるジョン・デューイの知識観から得ることとした。デューイは「保証づきの言明可能性(warranted assertibility)」という独特の知識の定義を案出したが、この定義による彼の知識論には、「知識を支える習慣と探究のサイクル」「動態としての知識」「探究における言語の重要性」という特徴が含まれていることを指摘した。そしてデューイが、あらたな知識を生成するまでの一連のプロセスを「探究(inquiry)」として、探究をうみだす源泉を「習慣(habit)」としてそれぞれ位置づけたことについても、彼の論考を踏まえて整理した。最後に、デューイのこうした知識観が、音楽実践に適合するものであることを論証したうえで、音楽学習研究にどのような示唆を与えるのかについて考察した。

行為としての音楽

1970年代まで、西洋クラシック音楽の分野において、音楽といえば楽譜に記された作品やそれを演奏した際の鳴り響く音を指すことが一般的であった。いわば「音楽=作品」の音楽観である。しかし、知識の理論すなわち認識論におけるパラダイム転換を踏まえれば、「音楽=行為」の音楽観の適用がふさわしいと考えられた。そこで、スモール(Christopher Small)(1985)の「ミュージッキング(musicking)」エリオット(David J. Elliott)(1995)の「ミュージッキング(musicing)」の音楽観を取り上げて検証する作業をおこなった。

スモールとエリオットの双方の論を比較し、共通点と相違点について検討した。2者の論には、発音は同じ「ミュージッキング」の名が冠されているもが、スペルは上述のように異なっている。にもかかわらず、日本の先行研究においては同一視されているきらいがある。詳細に彼らの論を比較していくなかで、2者の論の異同が明らかとなり、スモールがエリオットに対し、批判的な言及をおこなっていた事実を見出すことができた。

共通点としては「音楽を行為であるとした点」「演奏や聴取だけでなく、パフォーマンスに関わる全ての行為を音楽とした点」「音楽に関わる身体のはたらきに重要性を見出した点」「音楽の行為や活動が展開される社会、文化的なコンテクストを重要視した点」「西洋音楽等、特定の音楽文化における価値体系を絶対的なものとししない点」が挙げられる。一方で相違点としては、「身体的位置づけと強調点」「社会・文化的コンテクストにおける強調点」が抽出された。なお本研究では、これらの相違点のうち、前者についてはエリオットに、後者においてはスモールに優位性があることを指摘した。

多元的な知識

を踏まえて、本研究ではエリオットのmusicing論において展開された「音楽の知識(Musical Knowledge)」「音楽の思考・知(Musical Thinking and Knowing)」に関する論を詳細に検討する作業をおこなった。行為

とその集積である実践としての音楽における知識の問題について、詳細な論を展開し、また類型化を試みた論者はエリオットを置いてほかにはみられないためである。

エリオットは1995年に“Music Matters”初版を発表したが、ここで先述のMEAE批判をおこない、4タイプの多元的な知識が関わる手続き的な過程として音楽実践を論じた。この4タイプの知識とは、「フォーマルな音楽の知識(formal musical knowledge)」「インフォーマルな音楽の知識(informal musical knowledge)」「印象的な音楽の知識(impressionistic musical knowledge)」「監督的な音楽の知識(supervisory musical knowledge)」である。本研究ではまずこの4つのタイプの音楽の知識について、性質や特徴を整理した。

また、エリオットは初版発表から20年を経て、2015年にマリッサ・シルヴァーマン(Marissa Silverman)を迎え、大幅改訂した“Music Matters 2nd edition”を発表している。第2版では、MEAE批判を超え、エリオットら自身の音楽教育哲学を自立したものとして構築しようとする姿勢が貫かれている。音楽知識に関する論も大きく変化し、音楽知識ではなく、音楽の思考・知(musical thinking and knowing)の概念が用いられ、タイプも8つのものが示されている。それは「手続き的な音楽の思考・知(procedural musical thinking and knowing)」「言語的音楽思考・知(verbal musical thinking and knowing)」「経験的な音楽の思考・知(experiential musical thinking and knowing)」「状況的な音楽の思考・知(situated musical thinking and knowing)」「直観的な音楽思考・知(intuitive musical thinking and knowing)」「価値発見的な思考・知(appreciative thinking and knowing)」「倫理的な音楽思考・知(ethical musical thinking and knowing)」「メタ認知的な音楽の思考・知(metacognitive musical thinking and knowing)」である。これらの性質と特徴についても整理をおこなった。

この作業の最後に、エリオットによる音楽の知識論の功績と課題について検討した。功績は、音楽実践と結びついたコンテクストにともなう思考・知の存在や身体に結びついた知の存在に積極的に意味を見出し、それを含めた音楽教育の構想を提言した点にある。一方で、それぞれのタイプの知識の相互連関、成員同士の相互作用とそこでの知識発現のフェーズ、言語的な知識や思考・知の様相、コンテクストと身体の位置づけのしかたについては、検討不足もしくは検討がなされていないことが明らかにされた。

(3) 音楽学習における多元的知識の実践的展開について

子どもたちの発話や行為といった微視的なデータを扱うにあたって、発達心理学や幼

児教育学の分野で用いられているマイクロ・エスノグラフィの手法を適用することがふさわしいと結論付けた。これらの手法を用いた研究の成果については、学会にて口頭発表をおこなった。下記〔学会発表〕のこれにあたる。さらに、博士号の学位申請論文の主要部分として論述している。その成果の概要は以下のとおりである。

マイクロ・エスノグラフィでは、エリオットの提示した8タイプの「音楽の思考・知」のうちの6タイプの音楽の知識について検討し、以下のことが明らかにされた。

言語的な音楽の知識

子どもたちの発話はすべて、言語的な音楽の知識の発現といえるものであるが、これは、ほとんどが直観的な音楽の知識を言語化したものであった。経験的な音楽の知識が基盤的にはたらく中で何らかの違和感や嫌悪感、驚きが生じた場合に発話がなされていた。またこうした発話が複数の子どもたちによって連鎖的に生じる場合、類似する意味の異なる語がもちいられていた。

子どもたちは、教師の発問に答える場合には、特定の音楽の要素への言及をする傾向にあった。ただしこの場合、音楽的概念の名辞が用いられるのではなく、例えば「音がはやかった」といったように、述語の中でどの音楽的概念について述べているのかが示されていた。

また、上述したような直観的な音楽の知識の言語化による発話が、複数の子どもによって重ねられると、その後に音楽的概念の名辞をともなう発話がなされていた。発話している子ども自身が、よく意味が分からないままにその名辞を道具的にもちいて探究しているという点が、その使用における特徴であった。

経験的な音楽の知識

経験的な音楽の知識は、まさに心身一元論的な知識であり、子どもたちの習慣的な行為のなかに発現していた。このタイプの音楽の知識は、音楽学習におけるデータベースや準拠の役割を果たしていると考えられた。また既存の経験的な音楽の知識の通りに楽曲の響きや活動が進行していく場合には、子どもたち自身には彼らがおこなっている行為が意識されないようであった。

直観的な音楽の知識

直観的な音楽の知識は、発話にもっとも容易く、子どもたちの相互作用の契機となっていた。子どもたちは違和感や嫌悪感、驚きとともに「悲しい曲!」「すごい」等と発話したが、これは直観的な音楽の知識の言語的な音楽の知識への変換といえるものである。また、多くの子どもがそのような発話を連鎖的におこなうことによって、子どもたちの間でその楽曲に対する解釈が共有されていき、その後により分析的な、音楽的概念を用いた発話がなされるようになっていた。

価値発見的な音楽の知識

価値発見的な音楽の知識がはたらいっているとみることのできる発話・行為のプロセスはほとんどなかった。しかし、唯一みられた探究の6フェーズすべてを辿ったプロセスの終わりに、子どもたちが短調のよさや面白さをあらたに見出していることとみられる事例があった。このことから、価値発見的な音楽の知識は、探究のプロセスが「確定した状況」の第6フェーズに至り、終結した場合に、そこで生成されるものではないかと考えられた。

倫理的な音楽の知識

子どもたちの倫理的な音楽の知識は、エリオットのこのような音楽作品に結びついた倫理に関してではなく、授業という場における倫理にもとづく知識であった。そのような倫理的な音楽の知識は、子どもたちの発話内容をゆるやかに規定していた。具体的には、教師による発問に子どもが答える場合にはこの知識が比較的つよきはたらき、特定の音楽の要素に言及する分析的な内容の発話をするようになっていた。一方で子どもたちが自ら発話する場合には直観的で、時にユーモアを交えた内容となっており、そこでは倫理的な音楽の知識による発話内容への規定の度合いはゆるやかであると考えられた。

メタ認知的な音楽の知識

子どもたちは、他者の行為を観察しながら、同時にその相手に自らの行為を見せて示す場合があった。その際に、自らの行為を調整し、よりはっきりとした動きへと変化させていた。ここで子どもたちが、メタ認知的な音楽の知識を発現させていると考えられた。他者の行為をリソースとして用いることで、このタイプの知識ははたらかせられるようになるものと考えられた。

これらの検討・考察については、博士学位申請論文の中で記述し、2018年6月現在審査の途上にある。

(4) わらべうたを用いた教材開発

本研究では、わらべうたの教材化もおこなった。2018年4月に刊行された教員養成課程向けテキストにおいて、わらべうたの旋律法を生かした音楽づくりの活動方法を提案した。これは下記「5.主な発表論文等〔図書〕」の にあたる。

小学校中・高学年向けの学習活動として次のようなアイデアを提案した。子どもたちの耳慣れているわらべうたを歌う。旋律が2音からなることを学ぶ。オスティナートによる伴奏に合わせて、即興的に「呼びかけと応答」をつなげていく。うたい出しと、うたの最後の旋律をつくり、音楽に構造をもちたす。

またこの提案と合わせて、本研究で明らかになった、日常のなかで自発的に、自由にわらべうたを作り出している子どもたちの姿についても、日ごろから子どもたちがしている素朴な音楽づくりの行為をとらえて寄り

そう姿勢をもつことが小学校教諭に求められることや、子どもたちのつくりだす音楽のよさや面白さを見出して価値づけ、臨機応変に学習活動へと結びつけていくという、共感的な態度と自由な発想をもつべきであることを改めて述べた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

— 高見仁志、森薫、大澤智恵、仙北瑞帆、菅裕(2018)「音楽に関する実践知研究—可能性と課題—」『宮崎大学教育学部紀要 芸術・保健体育・家政・技術』第90号、宮崎大学教育学部、pp.37-48

— 高見仁志、森薫、大澤智恵、仙北瑞帆、菅裕(2017)「音楽に関する実践知研究の展望—「即時の知」と「信念・価値観としての知」に着目して—」『音楽学習研究』第13巻、音楽学習学会、pp.69-78

— 森薫(2016)「子どもの自発的なうたに関する検討—小学校音楽科の授業観察を通じて—」『未来の保育と教育—東京未来大学実習サポートセンター紀要—』第3号、東京未来大学、pp.45-52

— 森薫(2016)「となえうたの教材化に関する基礎的検討—「どれにしようかな」の採集調査と「活動理論」をふまえて—」『教材学研究』第27巻、日本教材学会、pp.159-170

〔学会発表〕(計5件)

高見仁志、菅裕、大澤智恵、森薫、仙北瑞帆「音楽に関する実践知研究(2)—「即時の知」と「信念・価値観としての知」に着目して—」(共同企画) 日本音楽教育学会第48回大会(於・愛知教育大学)、2017年10月

高見仁志、菅裕、大澤智恵、森薫、仙北瑞帆「音楽に関する実践知研究(1)方法論上の可能性と課題」(共同企画) 日本音楽教育学会第47回大会(於：横浜国立大学)、2016年10月

森薫「音楽学習に関わる知識についての検討—あらたな知識の理論の構築をめざして—」(単独) 音楽学習学会第12回研究発表大会(於：九州女子大学)、2016年8月

森薫「となえうた「どれにしようかな」の音楽的多様性と教材化に関する試論」(単独) 日本音楽教育学会宮崎大会

(於：シーガイアコンベンションセンター)、2015年10月

森薫「うたうという行為の諸相 ―ある小学校での授業観察を通じた考察―」(単独) 音楽学習学会第11回研究発表会(於：九州女子大学)、2015年7月

〔図書〕(計3件)

高見仁志編著、森薫他著(2018)『新しい小学校音楽科授業のために』ミネルヴァ書房。「第4章 音楽づくり」(pp.46-55)・「第14章 保幼小連携」(pp.133-138)を執筆した。

笹野恵理子編著、森薫他著(2018)『はじめて学ぶ教科教育 音楽』ミネルヴァ書房。「第部 初等音楽科教育の課題と展望 1 多様な音楽文化の諸相と音楽教育」の「ポピュラー音楽」(p.107)の項を執筆した。

近藤俊行編著、森薫他著(2017)『子ども学への招待 子どもをめぐる22のキーワード』ミネルヴァ書房。「第17章 わらべうたと子ども」(pp.202-212)を執筆した。

〔産業財産権〕なし

〔その他〕

<http://morikaoru.com/>

上記ホームページにて業績リスト等を掲載している(随時更新中)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

森 薫 (Kaoru MORI)

東京未来大学・こども心理学部・講師

研究者番号：90624859

(2)研究分担者

なし